

【氏名】左近 幸村

【所属大学院】（助成決定時） 北海道大学大学院文学研究科

【研究題目】

帝政期のロシア極東統治政策と東アジアの国際環境

【研究の目的】

本研究は、ロシア極東史と東アジア史の研究の接点を、経済史の観点から探ることを目的とする。近年、近代東北アジアにおけるロシア極東とアジアの経済交流の重要性がロシア側の歴史学でもアジア側の歴史学でも認識され、トランス・ナショナルな観点を採用することの重要性が指摘されている。しかし実際には語学上の障壁から、お互いの歴史学の交流は進んでいない。またロシア側では、ロシア極東に関する歴史学の本格的な研究が立ち遅れているということもある。そこで申請者は、日本においてロシア極東の歴史を研究しているという利点を活かし、海域史に代表される近年進展が著しい近代東アジアの歴史学の成果を援用することで、ロシア極東をロシア帝国のみならず東アジアの歴史的動態の中に組み込んで、一国史的な枠組みにとらわれない歴史学を目指すことにした。

【研究の内容・方法】

本研究ではまず、ロシア極東に自由貿易体制が敷かれていたことに着目し、その体制下での物流を検証するために、満州穀物のロシア極東への流入を取り上げた。これまでの研究では、ロシア極東では農業が発達しておらず、そのため満州から大量の穀物が流入したという説明がなされてきた。しかし実はロシア極東側の食糧事情については、これまでの研究で十分に明らかになっていない。そこで本研究では、ロシア極東の農業事情と満州からの輸入穀物との関連に着目し、こうした通説理解を検討した。

史料としては、ウラジオストクのロシア国立極東歴史アルヒーフで収集した史料（総督の公式報告、地元商業団体の陳情書）、ロシア帝国大蔵省関税局刊行のロシア貿易年報（Обзор внешней торговли России по европейской и азиатской границам）、日露戦争後に行われた大規模な現地調査の報告である『プリアムールエ、事実・数値・観察（Приамурье. Факты. Цифры. Наблюдения）』や『アムール現地総合調査叢書（Труды Амурской экспедиции）』、ロシア極東で当時出されていた『プリアムール報知（Приамурские ведомости）』といった新聞・雑誌などを用いた。

これらの史料から、19世紀末から20世紀初頭にかけての満州穀物のロシア極東への流入経

路や流入量、ロシア極東における穀物の収穫量や人口の変動を割り出した。これらの関連を考察するため、軍兵站部による地元穀物の買付け政策や自由貿易制度の研究も行った。またこういった諸制度の存廃をめぐる論争を検証して、行政が地域経済にどのような意図を持って介入し、そのことがどのような影響を与えたかを明らかにした。

#### 【結論・考察】

以上の研究から、以下の2点が明らかになった。

- 1) ロシア極東においても農業は一定程度発展していた。それでも地元穀物が不足しているように見えたのは、兵站部が農業振興策として地元穀物を過剰に買付けていたからである。したがって、農業生産力の低さが満州からの穀物流入の増大の要因であるとしてきたこれまでの説明は、十分なものとは言えない。
- 2) 自由貿易制度は、ロシア極東内の各都市の産業構造をそれぞれ違ったものにした。その結果、満州穀物との結びつきも都市によって違ったものとなり、満州穀物へ保護関税をかける案が中央政府において出されたとき、ロシア極東内でも賛否両論が沸き起こった。

これまでの研究では、ロシア極東は東アジアと強い結びつきを持っていたということは、漠然と理解されていたものの、本研究はその結びつきの「内実」を明らかにした点で、これまでの研究を大きく前進させるものである。